

# 古代・中世の京都の墓

五十川 伸矢

はじめに

1. 墓の遺跡

2. 葬法の時代的変遷

3. 都市の墓の歴史的展開

おわりに

## 論文要旨

古代平安京や中世京都とその周辺の葬地となった地域の墓の考古学的資料をもとにして、都市とその周辺における墓の歴史的展開について考えてみたい。

平安京では、その京域内に墓を作らせなかったため、その周辺の山野に葬地が次第に形成されていった。古代には天皇や貴族などの人々の墓がみとめられるが、当初は墓参のないものであった。一般庶民は、その遺体を河原に遺棄されるものであったといわれており、墓が作られたとしても簡単なものであったらしい。12世紀にはいって、都市の外周部の葬地には、集団的な墓地が顕在化し、中世的墓制が確立していったとみられる。木棺に伸展葬される形態が主流であり、古代の墓の伝統が続いていた。13世紀にはいと、都市の内部にも墓が作られて、そのなかには、都市が解体して墓地が形成されるのではなく、都市空間を前提として墓地が営まれるものもあった。ここに京域内に墓を作することを禁じた古代からの伝統はついでた。墓の形態には、土葬では屈葬の木棺があらわれ、火葬骨は各種の蔵骨器に納入された。15世紀には、さらに墓の遺跡が増加し、墓を作りえた人々が増したことがうかがえ、直葬の形態をもつ土墳墓が、ややめだつようである。その背後には葬式仏教化した寺院があり、庶民のあいだにも累代の墓をもち、墓参をおこなう風が成立しつつあったとみてよい。16世紀には政治的に都市再編がおこなわれ、都市の空間設定に変化が生じると、その墓地や火葬場も運命をともし、移動をよぎなくされるものもあった。こうして、近世・近代へとつながる墓のありかたが定着していった。

## はじめに

京都は、古代以降現代まで1200年間にもわたって都市であり続けた特殊な地域である。生活空間と埋葬空間が、基本的には小宇宙的に自己完結していたと思われる他の多くの地域と異なって、京都の埋葬空間は都市の内外に広がり、なおかつ歴史的に大きく変動してきたことが、最近の研究によってわかってきた。

京都の墓や葬地に関しては、文献史学や金石文の研究が先行し、歴史上の人物の墓やゆかりの寺について関心をもつ人々も多い<sup>(1)</sup>。筆者は京都大学構内の遺跡調査において、たまたま歴史時代の墓の遺跡を調査する機会があり、こうした研究の驥尾に付して、十数年前に歴史時代の京都の墓について簡単にまとめたことがある[五十川1981]。その後、1983年に、第13回埋蔵文化財研究会が京都で開催され、歴史時代の墓に関する資料の集成と検討がおこなわれた[埋文研1983]。その結果、京都とその周辺の歴史時代の墓の遺跡についても、その具体的な形態や年代が明らかとなり、各地の墓と比較することができるようになった。さらに、その後の発掘調査の進展によって、京都における墓関連の考古学的資料は飛躍的に増加し、内容もはるかに豊かなものとなってきたため、ここで再度、調査成果を整理して、都市とその周辺における墓の歴史的展開について考えてみたい。

さて、考古学的な遺跡を考えてゆくうえで、京都という地域の特徴をいくつかあげると、まず継続的に存在した都市のなかに、天皇や公家などの人々が居住し続けたために、文献史料が豊富であり、遺跡地の歴史的展開がかなりの精度でわかる場合が多い。また、葬儀や墓所に関する記録も少なからず存在し、考古学的に発掘調査された墓の被葬者がほぼ推定できることもまれではない。本稿でも『京都の歴史』、『京都市の地名』、『史料京都の歴史』に結実した文献史学を中心とする研究成果を大いに活用させていただいた。

本稿ではまず、平安京・中世京都とその周辺の葬地となった地域を対象にして、個々の墓の遺構だけを考えるだけでなく、墓地の全体さらに、墓地まわりの地域との関連、さらにそれらの景観の変遷など、いわゆる遺構論的な視点で検討可能な遺跡をはじめ、その時代を代表するような重要な遺跡を順に紹介する。また、都市民の墓と思われる遺跡ばかりでなく、それと連動していたとみられる近郊農村の人々の墓についてもふれてゆきたい。そして、都市とその周辺の墓について、葬法がどう変化したか、また都市の歴史のなかで墓がどのように形成されていったかを簡単に解説したい。

なお、古代・中世の墓の遺跡一覧を本稿の末尾に付して、所在地、遺跡の種類、時代、参考文献を列記した。挿図に示した遺構や遺物の出典については、一覧の参考文献を参照されたい。また、遺跡には通し番号をつけたが、本文中の遺跡名の後に付した括弧内の墓番号は、遺跡一覧の番号と一致する。

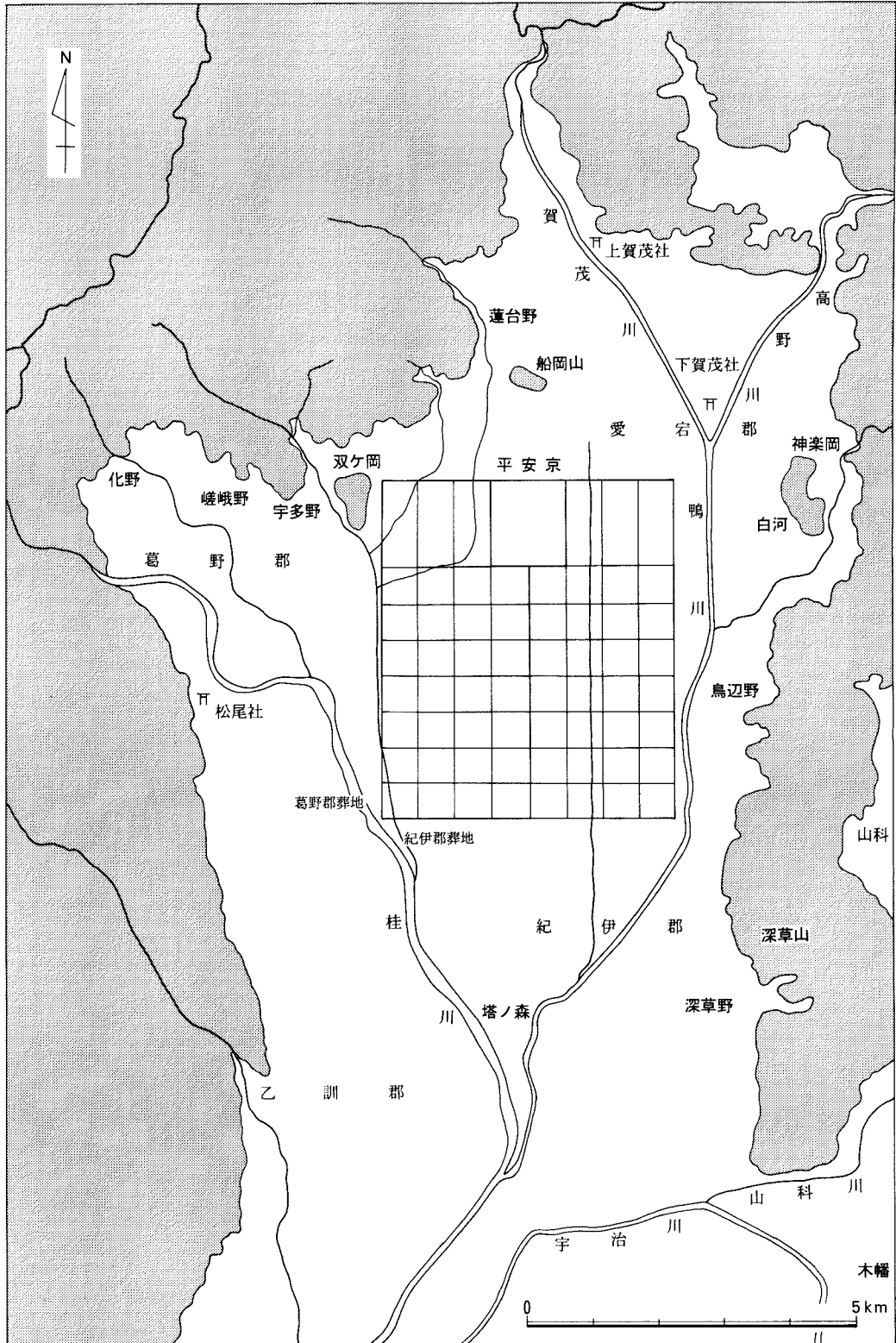


図1 平安京と葬地

## 1. 墓の遺跡

これまでに調査された墓の遺跡について、その造営時代順に解説する。ただし、墓地の造営がかなり長期にわたる遺跡の場合、最も古い段階の墓の時代にとりあげて、それ以降のものについても含めて記述することとした。また、前述のように墓の遺構そのものの構造と年代だけを取り扱うのではなく、できるだけ同地に形成された、墓と関連する遺構を含め遺跡全体の歴史的展開のなかで、墓がどのように造営されたかを検討してゆきたいと考える。なお、図中の矢印は北の方位を示す。

### (1) 奈良～平安前期の墓

#### 1) 西山の古墓

京都の西山の向日丘陵やその背後の丘陵部は、古墳時代以来の墓が稠密に分布する地域である。西京区大枝の伊勢講山古墓（墓53）は、木棺を用い、銅椀、水瓶、玉類などが出土した。また、向日市物集女の長野古墓（墓57）では、墓墳内に木棺を置き、外側に木炭をつめており、銅鏡や玉類、須恵器などが出土した。ともに奈良末～平安前期のものと推定されている。

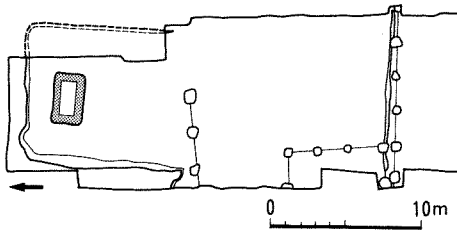
#### 2) 山科の古墓

山科盆地の西端に位置する西野山古墓（墓48）は、傾斜面に岩盤をうがって穴を掘り木棺をおさめたもので、棺を覆うように木炭が充填されていた。金銀平脱双鳳鏡や金装太刀、鉄板、硯など、正倉院資料にも匹敵する副葬品があり、奈良時代～平安前期のものとみられる。出土品は国宝に指定されている。盆地北端の安祥寺下寺推定地では、最近の調査によって、木槨のなかに木棺をおさめ、そのすき間に木炭を充填した古墓（墓50）が発見されており、乾漆製品や白銅鏡が出土した。また、墓域を設定したうえ墳丘（封土）をもっていたと推定されている。9世紀後半ごろのものとみられる。

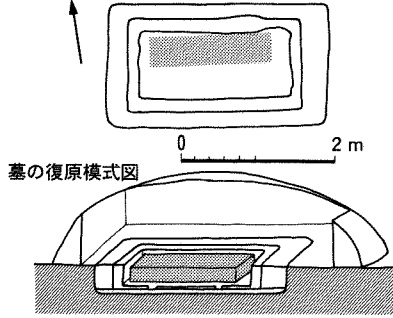
#### 3) 蔵骨器の諸例

遺骨を埋納した蔵骨器には、単独に出土したというのみで、出土状況が正確にわからないものも多いが、小石室や石櫃におさめられるのが普通である。古代には、蔵骨器として須恵器の薬壺形をした蓋付短頸壺や大日廃寺跡出土の緑釉陶器の短頸壺（墓51）というような、ごく特殊なものめだつ。ただし、長岡京左京70次調査（墓58）や京都大学構内 BD33区（墓3）の出土品のように入師器甕という日用品の場合もある。また、こうした古代の蔵骨器が群をなして検出されたという例はほとんどない。ちなみに、中世の蔵骨器の場合、1点のみ出土したという例はむしろ少なく、群集することが多い。古代と中世の墓地のあり方の違いが、ここにも反映している。その後、蔵骨器として、白磁・灰釉陶器・褐釉陶器などの陶磁器の壺類、須恵質長胴の壺などが使用されている。

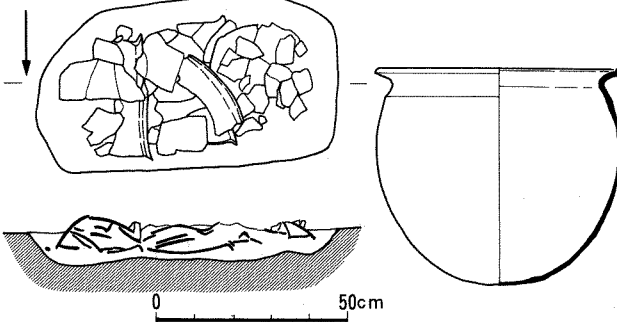
安祥寺下寺跡



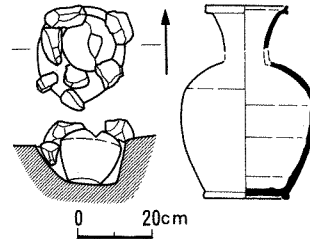
木棺



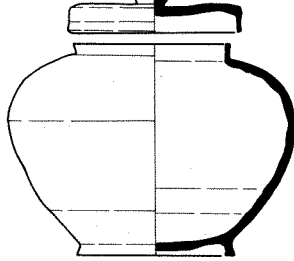
長岡京左京70次 甕棺



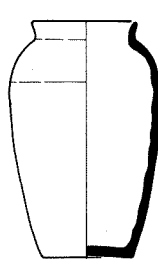
右京五条二坊 SK1



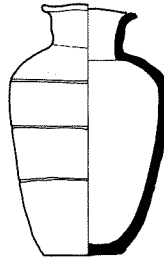
宇治市木幡南山



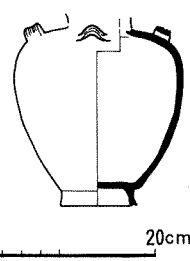
伏見区深草中ノ郷山



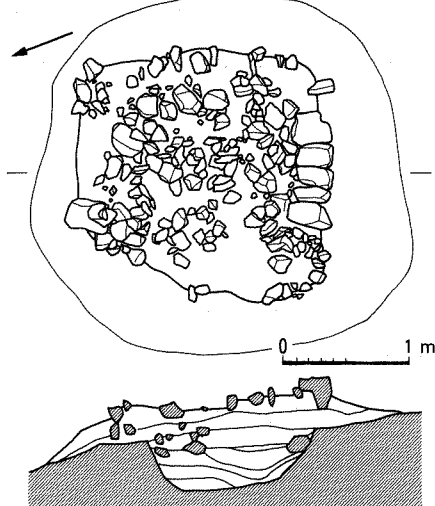
東山区渋谷



化野念仏寺境内



旭山古墳群 1号墳墓



長岡京右京130次 SX13001

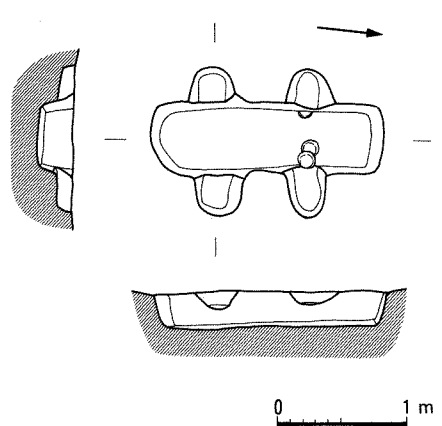


図2 墓の遺跡(1)

## (2) 平安中期・後期の墓

### 1) 右京三条三坊 (墓21)

平安京のほぼ中央部に位置した邸宅内の北西隅に、10世紀前半ごろの伸展葬による木棺土墳墓 SX46が検出された。折敷、化粧道具、銅鏡、黒色土器壺、須恵器壺などが副葬されており、掘立柱建物と同時期に存在していたと推定される。

### 2) 右京五条二坊 (墓22)

右京五条二坊の西堀川小路の上で、伸展葬の木棺土墳墓 SK 3が検出されている。11世紀後半～12世紀前半ごろのものであり、底板に3本の棧を短辺方向にわたす。当然のことながら西堀川小路の機能が低下・消失した状況で作られたものとする。

### 3) 古墳の再利用

嵯峨野周辺に点在する古墳については、造営後に追葬というよりも、時間を経た後に墓として利用されたものがある。西京区の福西古墳(墓55)では、石棺内を利用して、あらたに遺体を埋葬している。広沢古墳(墓13)では、平安中期ごろに火葬骨の埋葬がおこなわれた形跡がある。また、後述のように、古墳の墳丘端や近在に、中世の墓地がある場合が多い。古墳の存在する空間が兆域として長く意識されており、その空間を利用し続けたものといえよう。

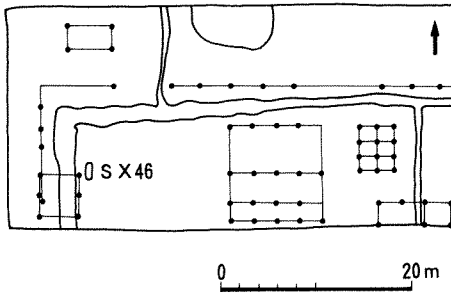
### 4) 常盤東ノ町遺跡 (墓15)

盆地西北部の双ヶ岡<sup>ならびがおか</sup>のすぐ西南麓に位置し、古墳の調査で検出された。鎌倉時代から近世におよぶ墓地と報告されているが、12世紀の後半には墓の造営が開始されているものと考えられる。伸展葬木棺土墳墓が鎌倉時代を中心に展開し、石室をもつものもある。確認できるものはすべて土葬である。鎌倉後期～室町時代のものには座棺すなわち屈葬の木棺土墳墓が増加し、それ以降のものは直葬の可能性が高いという葬法の変化がみとめられる。造営期間が長く、しかも葬法の画一性がきわめて高いところに特徴がある。区画の溝もあり、よく管理されてきた墓地の典型である。双ヶ岡に無常所があったことは、『兼好法師集』の歌<sup>(2)</sup>にみえ、常盤仲ノ町遺跡(墓16)とともに、双ヶ岡の一角に造営された都市民の墓と考える。

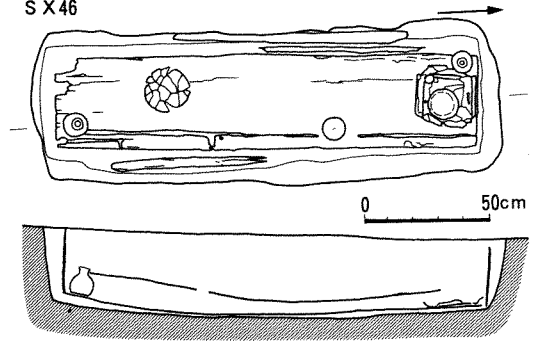
### 5) 京都大学構内 AT27・29区 (墓5・6)

京都盆地の東北部にある神楽岡<sup>かぐらおか</sup>(吉田山)の西麓、吉田社にほど近い。AT27区では、木棺土墳墓・土墳墓がみられ、墓域は溝によって区画されている。木棺は鉄釘で板材を止めており、鉄釘の位置から木棺の大きさや構造を推定できる。SK 3には、定窯系白磁碗が副葬されていた。AT 27区の東約100mに位置するAT29区では、墓とみられる方形の土坑群があり、12世紀中葉ごろの土師器が少量出土した。『権記』長保3年(1001)6月20日条に「吉田社の北三丁内に葬送の處あり」、また『小右記』永祚元年(989)9月26日条には「吉田卒堵婆供養所」の記載があり、吉田寺にかかわるものと考えられている[杉山1954]。これらの遺跡は、『権記』や『小右記』に記載された、都市民も関わる墓地の流れをくむものにほぼ該当すると思われる。

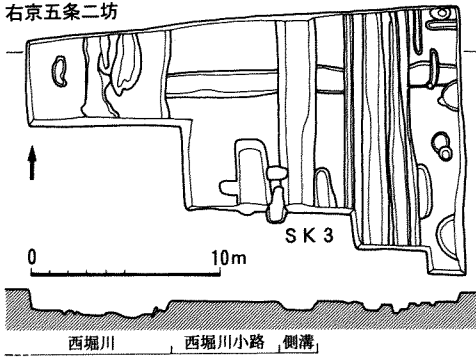
右京三条三坊



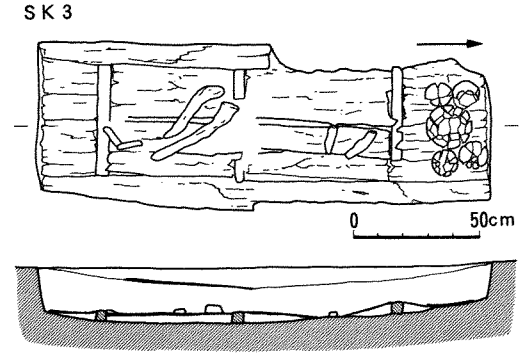
S X 46



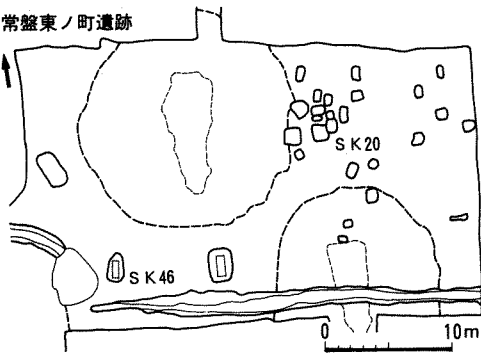
右京五条二坊



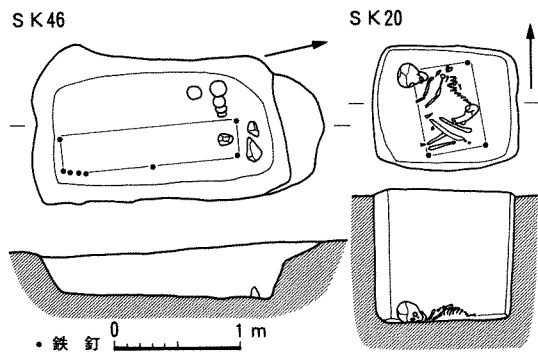
S K 3



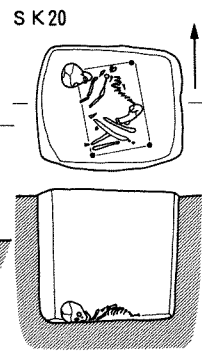
常盤東ノ町遺跡



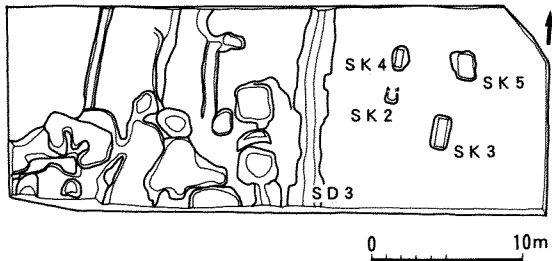
S K 46



S K 20



京都大学構内 A T 27区



S K 3

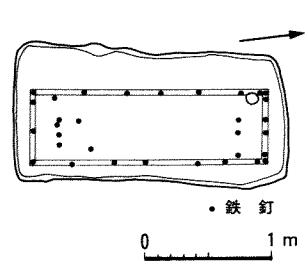


図3 墓の遺跡(2)

### (3) 鎌倉時代～南北朝時代の墓

13～14世紀ごろの墓は多数検出されている。考古学的に検出する墓の形態が整い、かつ造営された墓の数も、それ以前と比較して飛躍的に増加したものと推定される。

#### 1) 京都大学構内 BE29区 (墓4)

神楽岡(吉田山)の北麓に位置し、四角の基壇のまわりを二重に堀で囲んだ形状の遺構が調査されており、鎌倉初期に作られた火葬塚跡と考える[岡田・吉野1979]。その周辺部をかなりの密度で調査しているが、近接して歴史時代の土壌墓なども発見されない。これは、天皇や皇族、貴族の火葬の場である貴所<sup>きしよ</sup>の跡に築かれた火葬塚であろう。長岡京右京第130次調査(西陣町遺跡、墓60)では、11世紀後半の四角の堀状遺構が検出され、中央に建てられていたとみられる石塔の相輪部が出土した[木村・中井・北村1985]。また、伏見区竹田の白河天皇陵の周辺調査では、塚の堀(墓44)が調査されている。これらも同様の火葬にかかわる遺構と考えられる。

#### 2) 京都大学構内 AP22区 (墓7)

神楽岡(吉田山)西南麓の平坦地、12世紀以降に六勝寺<sup>りくしょうじ</sup>や白河御所などの造営が進み、鴨川を越えて都市が東に拡張することによって生じた都市空間(白河街区)に位置する。条坊に沿ったほぼ真北を示す溝SD10の西に街路がある[浜崎1991]。その西側には輸入陶磁器などを含んだ土器溜や建物などがあり、藤原北家<sup>かしゅうじ</sup>勧修寺流の吉田家の邸宅跡と推定される。菩提寺浄蓮華院はさらに西方に比定される。溝を挟んで東側には、13～14世紀ごろの墓地がひろがる。墓地内には細分区画の溝があり、木棺土壌墓、甕棺、壺棺のほか、漆箱、輸入陶磁器、瓦器羽釜や鍋などの蔵骨器を検出した。土葬・火葬の混在する多様な葬法がみられる。西側のAO21区でも14世紀後半の木棺土壌墓(墓8)があり、南側のAO22区でも、蔵骨器を納めた墓が検出されている。墓域はさらに東西南北の隣接地域に連続している可能性が高い。墓地は当初街路に規制されており、都市民の墓地とみてよい。

#### 3) 常盤仲ノ町遺跡(墓16)

常盤東ノ町遺跡の西南に位置し、鎌倉後期から江戸時代まで連綿と継続した墓である。北群と南群があり、群ごとに独自に展開したようである。報告者による墓の分類を筆者なりに解釈すると、A～Eには伸展葬の木棺土壌墓が含まれており、Cは座棺の木棺土壌墓、FとGには桶棺のものが相当する可能性がある。後述のようにCが中世でもややおくれて出現し、FとGが中世末～近世に現われることに矛盾はない。この墓地は火葬、土葬が混在しており、墓域も特に整然と設定されていないという特徴があげられる。

#### 4) 東本願寺前古墓群(墓35)

JR京都駅から北へ烏丸通を北上すること500mの地点で、地下鉄工事にともなう調査によって発見された。その歴史的变化を整理すると、以下ようになる。まず、平安後期に町が形成されはじめ、建物の柱穴とみられるピット群が過密に存在する。平安京的街区の成立が、この地区で



は遅いのか、小路の成立もこのころかと推定されている。その後、墓が形成されるが、墓域を細かく確定する溝や柵なども少ない。墓が造営される間、道路遺構は連綿と継続し、この一帯は都市空間として機能しつづけている。室町後半（15世紀後半～16世紀半ば）には、墓地が衰退しはじめるが、積極的な土地利用がないため、この地は墓地として展開していたらしい。17世紀初頭にいたり、本願寺が設置され、その門前町が形成されはじめると、道路の付け替えや新設などがおこなわれ、中世の景観は一変する。

#### 5) 左京八条三坊（七条町一帯、墓36）

現在の JR 京都駅のすぐ北側の観光旅館やデパートの立ち並ぶ地域に位置する。9～10世紀は小河川が流入し、土馬、人面墨書土器などによる祭祀がおこなわれた場であった。右京の衰退によって東市が殷賑をきわめ、やがて12世紀にいたり七条町が大きく展開して、そこに商工業者の集住する街区が形成されたことはよく知られている。南北朝時代以降にはやや住居空間として衰退してゆくが、墓地は継続して形成されていたものとみられ、一時的に鋳物工人が操業をおこなったりして、その生産的活動も続いている。15世紀後半の応仁の乱の後には、この町が衰退し、空閑地が順次形成されていった。この七条町の中世は、商工業者と墓地の世界であったといわれ、中世前半の京都を支えたきわめて特徴的な空間であったと考えられている [野口1988]。

#### 6) 僧侶・貴族・武士の墓

このほか、僧侶・貴族・武士の墓として、上述の墓と比較して特殊なものが検出されている。

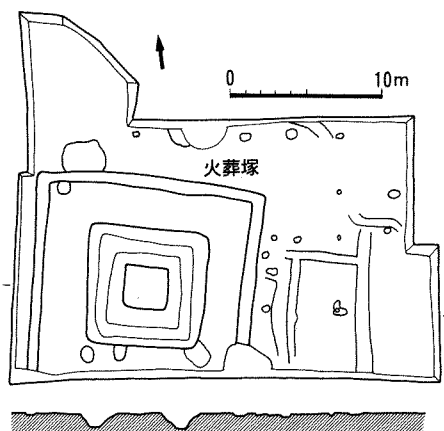
東福寺の塔頭の墓（墓28・29） 東山区東福寺塔頭龍吟院では石櫃のなかに銅製の蔵骨器が納入されており、正応4年（1291）年に入寂した東福寺第3世大明国師の墓と推定される。また、同寺塔頭永明院開山堂の基壇下に石室があり、元代の白磁香炉を副葬していたが、これは延慶元年（1308）に入寂した同寺第6世円観禅師の墓とみられる。

醍醐寺三宝院墓地(墓47) 伏見区醍醐<sup>さんぼういん</sup>三寶院墓地では、13世紀後半以降16世紀の末にいたるまで、常滑産・信楽産・備前産の大甕などを蔵骨器として、継続して埋葬がおこなわれている。14世紀末～15世紀前半には石塔が建立され、石による基壇が形成された。中央の土壌が当初の墓であり、その周囲のものは、有縁無縁が墓を加えていったという。ここは菩提寺という寺に形成されたもので、基本的に火葬によっている。

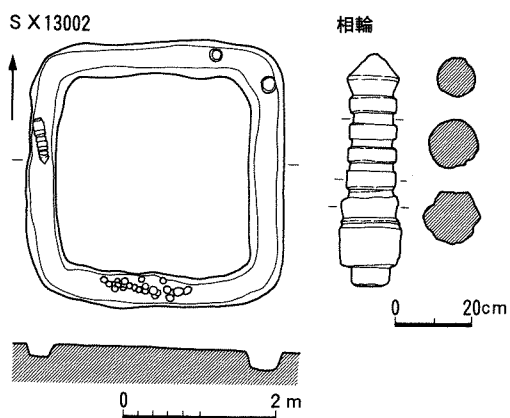
光明峯寺奥ノ院九条道家墓(墓30) 東山区今熊野光明峯寺奥ノ院<sup>いまくまの</sup>では、御影堂と推定される建物の東にマウンドがあり、方形基壇の中央に石室をもうけていた。上部には十三重石塔があったという。13世紀中葉に火葬骨を甕にいれて埋葬したものと推定されており、九条道家の墓と考えられている。

法住寺跡の武士の墓(墓25) 東山区三十三間堂廻り法住寺跡で発見された墓では、墓壇内に鎧冑を裏返しにして、その上に木棺を置いたと推定されている。12世紀後半～13世紀に造営されたものであり、鎧冑の存在から武士の墓であることが確実視されるが、被葬者の比定は困難といわれている。武士政権成立に至る動乱期における武士の葬法としてふさわしいものである。

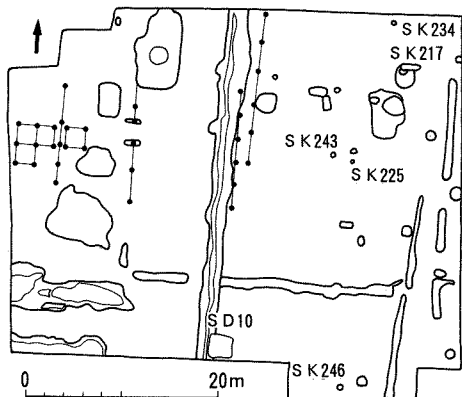
京都大学構内B E29区



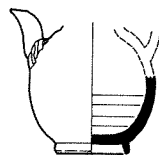
長岡京右京130次



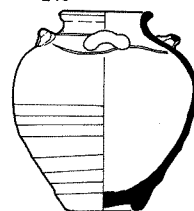
京都大学構内A P22区



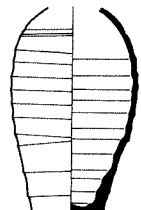
S K 206



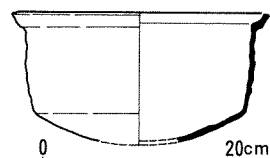
S K 246



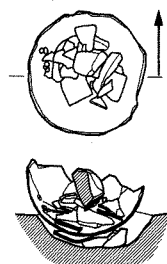
S K 206



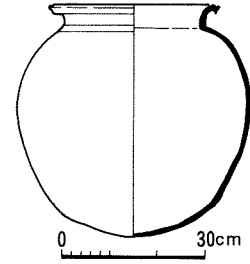
S K 217



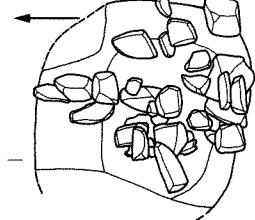
S K 225



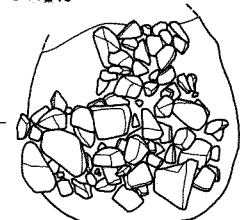
S K 225



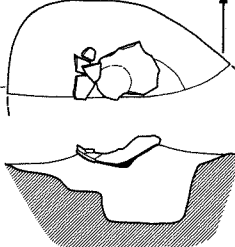
S K 217



S K 243



S K 234



S K 246

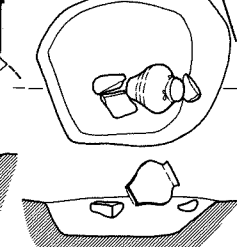
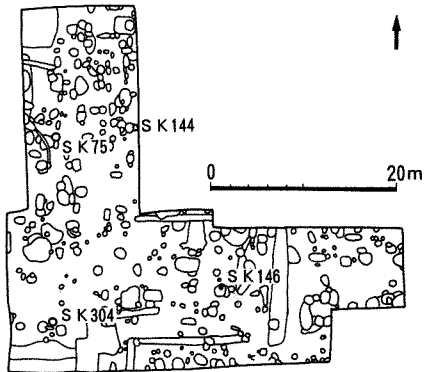
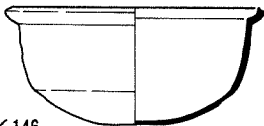


図4 墓の遺跡(3)

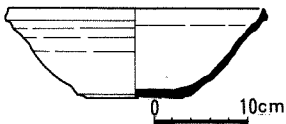
左京八条三坊



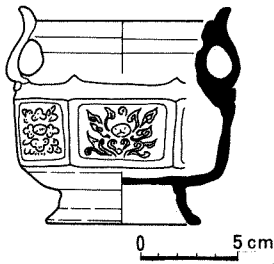
S K 144



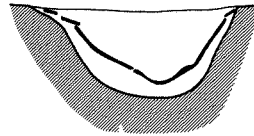
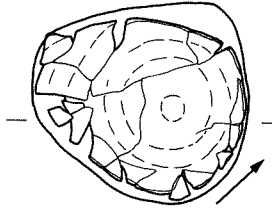
S K 146



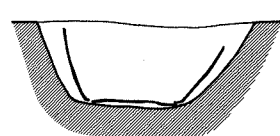
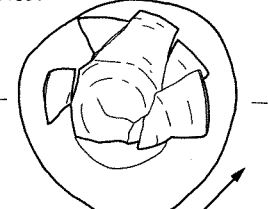
円鑑禅師墓石室



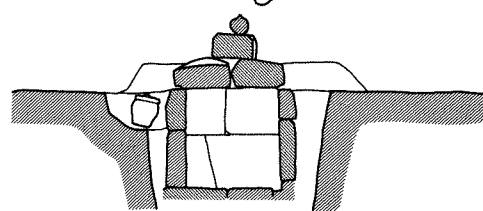
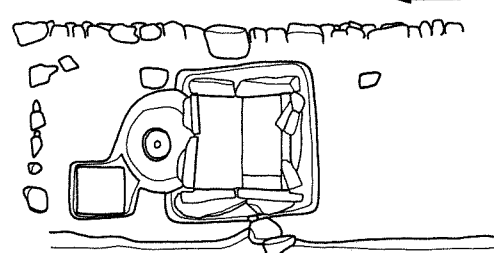
S K 75



S K 304



東福寺永明院円鑑禅師墓



醍醐寺三宝院墓地

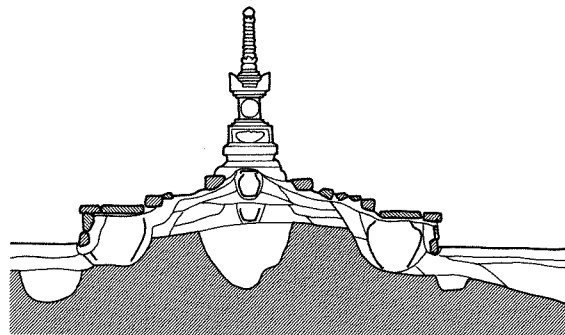
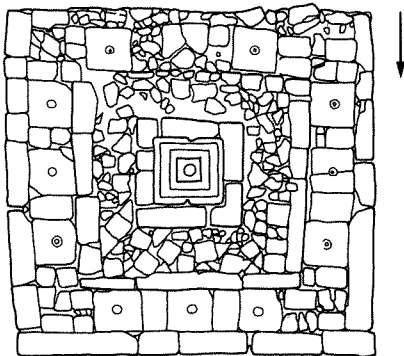


図5 墓の遺跡(4)

#### (4) 室町時代の墓

##### 1) 烏丸線内遺跡No23・42地点 (墓19)

15～16世紀の土壇墓が、現在の御所の東側一帯で地下鉄烏丸線建設の調査によって検出されている。ここは、当時の下京の南辺にあたる。墓には、瓦器鍋や須恵器すり鉢を蔵骨器として利用しているものがある。

##### 2) 左京三条三坊 (墓24)

現在の烏丸通り御池の上京と下京の間と思われる地に15世紀の墓地があった。ここでは溝によって区画した空間に墓地が形成されていた。ほとんどが竹籠などの粗末な容器にいった状態で直葬されている。副葬品も六渡銭程度しかみられない。都市の空闲地に形成された密集した墓地であり、被葬者は庶民とみられる。円福寺という寺院との関連が指摘されているが、詳細は不明である。

##### 3) 同志社大学構内遺跡 (墓18)

現在の御所の北、当時の上京の町の東辺にあたり、相国寺の南辺の一角に位置する。16～17世紀に墓地がいとなまれた。体を折曲げて直葬したものと甕棺によるもので構成される。基本的に土葬と推定され、一石五輪塔も出土している。報土寺と呼ばれる寺、あるいはその前身の寺に付属した墓地と考えられ、17世紀前半には、公家屋敷が設置されて廃絶したようである。

##### 4) 松蔭町遺跡 (墓20)

中京区寺町松蔭町の同志社大学の構内地の遺跡でも、16～17世紀の墓地が検出されている。後に、大工頭を歴任した中井家の屋敷地となったため、墓も移されたとみられるが、わずかに残された骨片などによって、土葬による墓地があったことが判明している。天正17年(1589)～宝永5年(1708)の間、この地にあった信行寺にかかわる墓地と推定される。

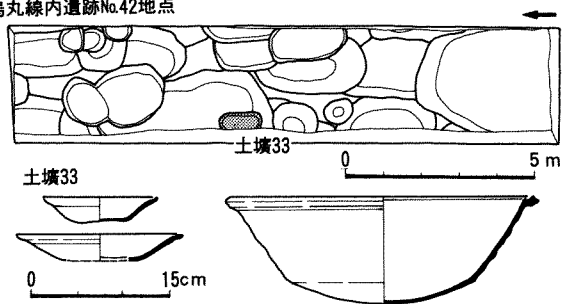
##### 5) 鳥羽離宮跡57次 (墓42)

伏見区の鳥羽離宮遺跡の東辺には、鳥羽天皇陵・近衛天皇陵・安楽寿院などが散在するが、これまでのかなり稠密な遺跡調査でも、中世・近世の墓地は、この遺跡以外あまり発見されていない。遺骸は竹籠や桶棺に納入されている。おそらく、離宮やその関連施設などの衰退後に形成された周辺農村にかかわる墓と考えられる。

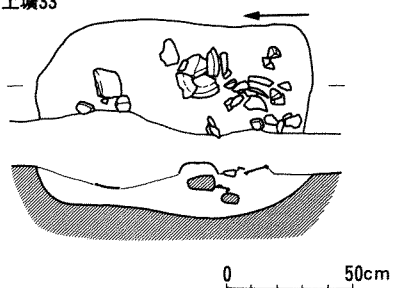
##### 6) 羽束師志水遺跡 (墓41)

桂川右岸、長岡京跡の東にあたる羽束師志水遺跡では、16世紀から近世へいたる墓地が検出されている。ここでは同じ位置に墓が造営され続けており、まず、室町時代後半に火葬墓が出現し、桃山時代には、蔵骨器として備前産の甕をつかった火葬墓や直葬による墓がみられる。ここにみられる石積遺構などは、墓地としては整備された特徴を示すもので類例がない。そして、江戸初期に桶棺・箱棺土葬へと展開する。この墓地の盛衰は、隣接する集落の盛衰と軌を一にするもので、清水本荘の富裕な荘民の墓地とみるのが妥当であろう。

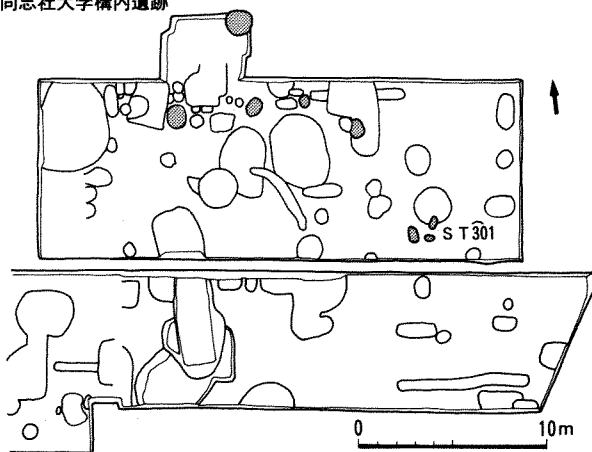
烏丸線内遺跡No.42地点



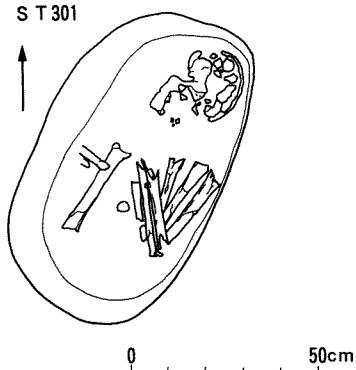
土壌33



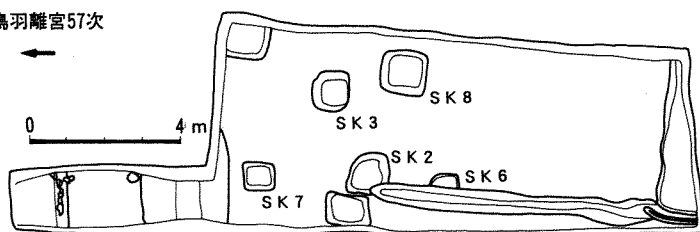
同志社大学構内遺跡



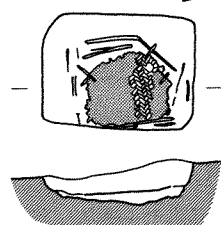
S T 301



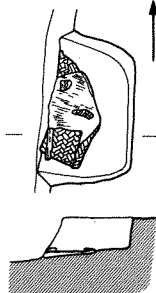
鳥羽離宮57次



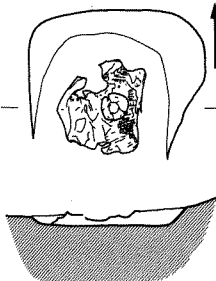
SK 7



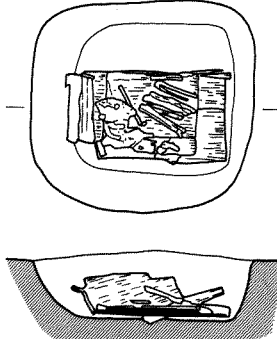
SK 6



SK 3



SK 8



SK 2

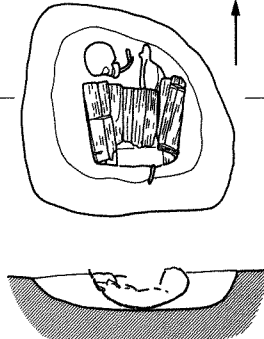


図6 墓の遺跡(5)

## 2. 葬法の時代的変遷

前章で述べたように、古代・中世の京都の墓には、その葬法に様々な形態をとるものがある。そこで、これらを整理して、その葬法の変遷を跡づけてみることにしたい。

### (1) 土葬の諸例

古代・中世の葬法には土葬と火葬があり、土葬には木棺や甕棺を使うものと直葬<sup>③</sup>とにわけられる。まず、木棺を用いるものについて、『続日本後紀』承和9年(842)7月15日条に、嵯峨天皇の喪葬に関する遺詔の記事があり、その墓は「棺槨を重ね、松の炭をめぐらす」ものであった。西野山古墓や安祥寺下寺推定地例などの類例がある。古代とくに律令体制の盛期に特徴的な葬法であり、10世紀以降にはこうした形態のものはみられない。検出例の少なさと副葬品の質の高さからみて、貴人の墓といってよい。

板材を組み合わせた木棺に伸展葬をおこなう通有の寝棺の形態は、古い伝統をもつものであるが、右京三条三坊、右京五条二坊、京都大学構内AT27区、常盤東ノ町遺跡、常盤仲ノ町遺跡、御堂ヶ池11号墳(墓12)などに例がある。木棺の板材の組み合わせには、鉄釘を用いるものが多く、釘の出土位置から棺の平面形を推定できる場合があり、底に数本の棧を短辺方向にわたすものがある。このうち最も古いものは10世紀の年代を示すが、鎌倉時代に続き、中世の半ばごろにはいつてやや減少するようである。この寝棺の主軸方向は、常盤東ノ町遺跡のやや時期の降る1例や御堂ヶ池11号墳例などを除けば、ほぼ南北にとるのが通例であり、副葬品の位置から考えて遺骸が北枕であったと推定されるものもある。また、平安時代の半ば以降13世紀ごろまでの木棺土壌墓に納められた副葬品には、かなりの優品というべき陶磁器などがあることも特徴的である。また、常盤東ノ町遺跡には、この木棺が石室に納められているものが1例あり、被葬者はやや高い階層の人物と推定される。

木製箱型の座棺の形態をとるものは、常盤東ノ町遺跡、常盤仲ノ町遺跡や左京八条三坊、鳥羽離宮第57次などにみられる。この形態では遺骸は屈葬されていたものとみられ、墓壇の占有面積の縮小を考慮したものであろう。その出現はさかのぼって鎌倉後期ごろであり、寝棺のやや減少する室町時代に盛行すると考えてよい。なお、桶棺は、鳥羽離宮57次調査で検出された16世紀の墓にみられ、このころより使用されはじめ、近世に盛行するものとみられる。

次に、直葬は最も簡便な葬法であり同志社大学構内、常盤仲ノ町遺跡、東本願寺前遺跡、京都大学構内AT27区、左京三条三坊などの遺跡でみられる。人骨の遺存するものもあり、そこでは屈葬の形態を示すものが多い。これは中世において最も普遍的な葬法であったと考えられるが、15～16世紀の遺跡においてややめだつ傾向がある。被葬者の階層の降下と、それによる墓の増加と関連するようであり、それらの遺跡において、一石五輪塔がともなうことも注目される。天文

元年(1532)11月30日付の尼崎墓所掟<sup>(4)</sup>には、葬儀の際の葬具や経費が詳細に記載されており、桶に入れて土葬する場合や庭に入れて葬る際の手間賃は、火葬に比較してはるかに廉価であった。これは、火葬が富裕な人々の葬法であったことをものがたっている。

## (2) 火葬の諸例

火葬の第1段階として、遺体を焼くための場が必要である。京都とその周辺では、これまでに3種のものが発見されている。まず、天皇、皇族や貴族が火葬される場合は貴所と呼ばれ、その跡には火葬塚が築かれた。12世紀後半に成立したと思われる『吉事略儀』<sup>(5)</sup>には、火葬塚に関する詳しい記載があり、それによると「貴所の荒垣鳥居などを壊し、近辺の無縁寺にこれを分ちて、鋤を採り土を覆う。其の後墓を築く。石率都婆を立てて、釘貫を立て廻して松を植え、四面に溝を掘る」というものであった。前述のように、京都大学 BE29区で検出した塚状の遺構は、この文献の記述にほぼ符合するものである。

次に、旭山古墳群で検出された1号墳墓(墓49)では、盛土の下に一边約1.3mの方形の土壌があり、四壁と底面は火を受けて赤く焼けていた。土壌内には多量の炭と人骨が検出され、ここで遺体を火葬した後、拾骨がおこなわれたと推定されている。このほか、長岡京右京第130次調査で検出されたSX13001(墓60)は、伸展葬の木棺をそのまま火葬するための溝状の土坑の施設であり、拾骨がおこなわれたものと推定されている。これらの施設は火屋<sup>ひや</sup>と呼ばれるものであろう。火葬の経費は、応永4年(1397)6月、東寺観智院の賢宝が茶毘に付された時は四百疋、文明18年(1486)10月に三昧聖が取り決めた茶毘料は参百文であった[京都市1968第3巻 p.107]。

拾骨を埋納する蔵骨器についてみると、金属製の容器に納入するものは、例が少ないが僧侶など特定の階層に限られるようである。また、武士や貴族、僧侶の墓には、各種の蔵骨器があるが、これを石室や石櫃と呼ぶべき空間に安置していることが多い。日用の瓦器鍋・羽釜や須恵器すり鉢・甕などの容器を蔵骨器として用いるものは、東本願寺前、京都大学構内 AO18区(墓9)、同構内 AP22区、烏丸線内遺跡No42地点や左京八条三坊など、検出例は枚挙にいとまないほどである。これらの盛行するのは、鎌倉時代以降である。蔵骨器をもたない火葬墓は、烏丸線内遺跡No42地点や左京八条三坊などにおいてみられるが、有機質の容器に遺骨が納入されていた可能性もあり、日用の容器を蔵骨器とする墓地のなかに存在する。

また、拾骨を容器に入れるというより、それにかぶせたという形状の容器もみられる。たとえば、烏丸線内遺跡No36地点土壌31では、瓦器羽釜を逆転した状態でかぶせており、京都大学構内 AO22区のSK15では、土壌の底部に備前産すり鉢を伏せている。これも蔵骨器と呼ぶ。

中世京都においては、蔵骨器専用の器があまり明確ではないようである。蔵骨器専用の容器が用いられるのは、まとまった宗教的集団がその地域を一円支配していたり、共同体的信仰形態が安定して継続しているような地域にありがちな現象ではないかとも考えられるが、有為転変の激しかったこの都市においては、そうしたことがおこりにくかったものと考えたい。

### 3. 都市の墓の歴史的展開

前2章で解説した墓の遺跡の資料をもとにして、その歴史的変遷について考えてゆくことにする。なお、図7に墓の遺跡の分布を、いくつかの時期ごとに示した。分布は現状であり、遺跡調査の進展の程度を示すものにすぎないが、それでも各時代の特徴をすくなく反映しているものとする。また、平安京から中世京都を経て近世京都にいたる流れに沿って、そのおおまかな都市形態の変遷も読み取れるようにしておいた。

#### (1) 平安京と墓

##### 1) 葬地の形成

平安前期ごろまでの墓は、西山や山科の地域にめだっており、古墳時代以来の伝統的な葬地に引続き造営されていたとみられる。また、こうした地域では、墓として古墳を再利用する場合もあり、嵯峨野の広沢古墳や福西古墓などでは、横穴式石室が古代の埋葬に使用されており、さらに常盤東ノ町遺跡では、12世紀以降古墳の周辺に墓地が営まれている。古墳のある空間が、長く兆域として意識され続けたからこそ、後代の墓が形成されたと考えてよいだろう。また、上下賀茂社や松尾社の周辺には、歴史時代にはいと墓がさほど作られていない。これらの神社が王城鎮護の社として穢れを嫌ったからであろう。

大宝喪葬令皇都条によれば、およそ皇都と大路近辺には埋葬してはならないとされていた。陵墓について、延喜式諸陵寮式に記載された陵墓の所在地をみると、紀伊郡深草、宇治郡山科・小野・木幡、愛宕郡鳥辺野・白河・神楽岡、葛野郡嵯峨野・宇多野・大原野、乙訓郡高島・石作・宇波多などがあり、それ以降もその周辺を大きく出るのは数少ない。このほか、貴族や武士の墓についてみると、北白川丸山には村上源氏の墓地があり[角田1969]、藤原家一門は、鳥辺野で茶毘に付され、宇治木幡の浄妙寺に埋葬されたものが多い[堅田1965, 林屋1957]。また、五摂家の九条・一条家の墓地は東福寺の境内にあり、古代貴族やその末裔たちも、その墓を都の外の地域に営むのを常とした[和田1976]。

国家による葬地の規制と設定に関しては、まず、長岡京時代の延暦11年(792)に、都に近接しているとの理由で、紀伊郡深草山の西斜面の埋葬を禁止する(『類聚国史』延暦11年8月4日)。平安遷都後の延暦16年(797)には、これまた京に近く、穢れを避けるべきであるとの理由で、愛宕郡と葛野郡の人々が家の側に墓をいとなむのを禁止する(『日本後記』延暦16年正月25日)。こうして、紀伊・愛宕・葛野の3郡において伝統的な山麓や家側の葬地に制限が加えられた。以後も、貞観8年(866)愛宕郡神楽岡周辺の葬送を賀茂御祖社(下賀茂社)に近いという理由で禁止している(『三代実録』貞観8年9月22日)。その後、貞観13年(871)には、葛野郡と紀伊郡において、もともと葬送と放牧の地であった所が耕作されているが、これを旧態にもどすように命じ



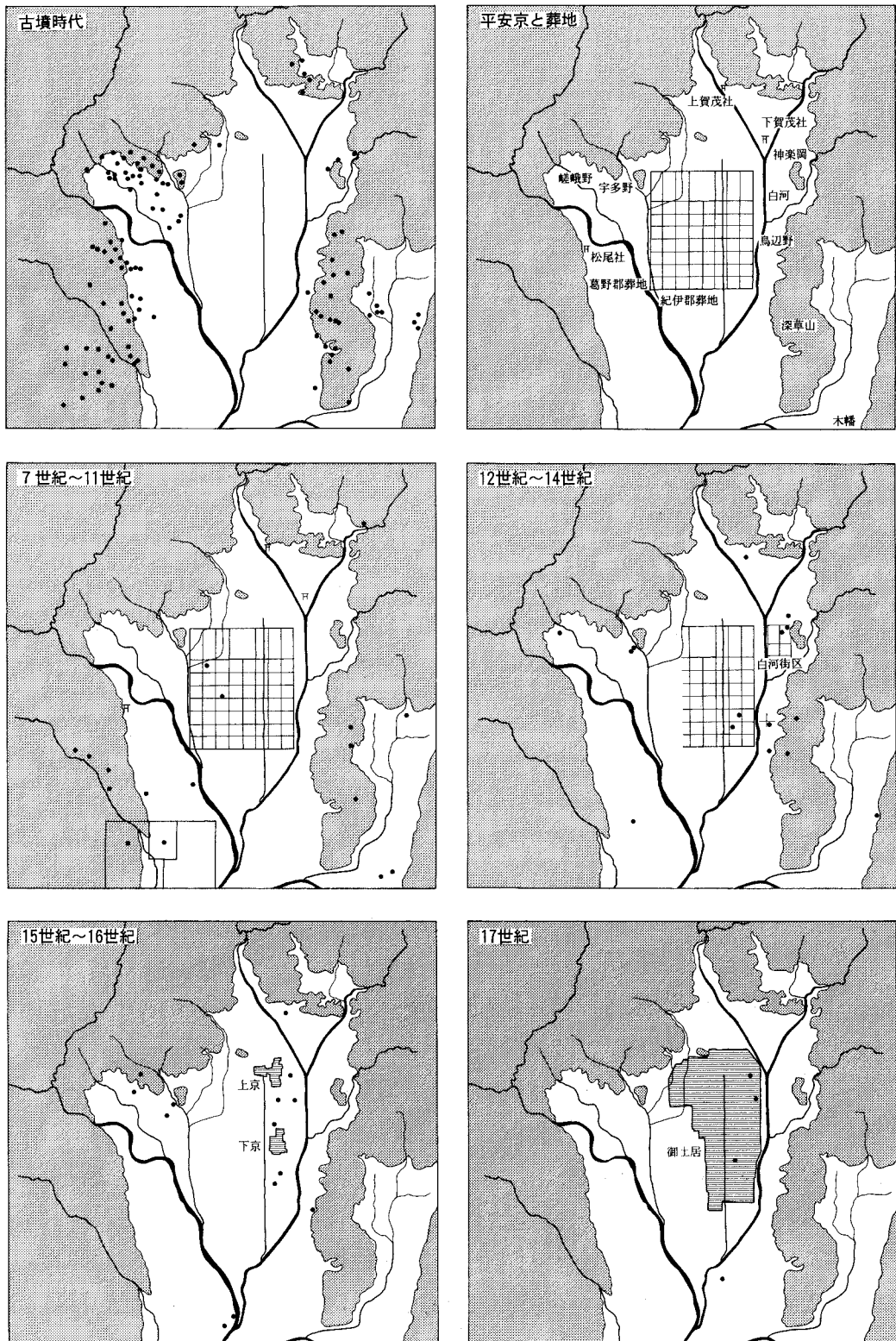


図7 墓の分布の変遷

ている(『類聚三代格』貞観13年8月28日)。それは平安京の南辺の桂川と鴨川の合流するあたり、<sup>きい</sup>佐比の河原と呼ばれる地であった。百姓の葬送の地をこうして設定しているわけであるが、伝統的な葬地としての利用と河原の開発は、ともにやむことなく人々によって継続されていったと推定される。

そして、すくなくとも12世紀には、鳥辺野、船岡山、<sup>あだもの</sup>化野、<sup>れんだいの</sup>双ヶ岡、蓮台野などの伝統的な洛外の葬地が確定してゆくのであり、有名な葬地も平安京創設の当時に確定したのではなかったのである。こうして葬地として設定された場所は、耕作のおこなわれた平野の部分ではなく、野・岡・山と呼ばれる地であり、平安時代の半ばごろまでは、天皇や貴族の遊宴狩猟の場や別業の地として利用されていたものが多い[宇野1979]。こうした山野には、遊興の場とともに葬地がモザイク状に点在していたものと思われ、統括的な所有者や管理者を欠いた空間であった。木幡の淨妙寺の周辺に散在したと思われる藤原家の墓地にみられるように、埋葬後に定期的な墓参をおこなうというような習慣は、平安時代の終りごろまではなかったといわれている[田中1975]。

## 2) 古代の墓の特徴

それにしても9～11世紀ごろの墓の遺跡に関しては、その検出例の少なさは著しく、なおかつ群をなして墓が形成されているという形跡も希薄である。『続日本後記』承和9年(842)10月14日の条に、左右京職と東西の悲田に対して料物を与えて、嶋田と鴨の河原に散乱する5500余の鬻體を焼かせたとあり、このような史料からみて、庶民の墓地は河原に形成されており、彼らの墓は墓墳を掘ってその中に安置埋葬されるようなものではなく、放置あるいは遺棄に近いものであったと考えられている[田中1975・1978]。しかし、果して天皇や貴族などを除く都市民の遺骸は、そのほとんどが遺棄に等しい扱いをうけたと考えられるだろうか。時代は降るが、寛元元年(1460)、鴨川の河原に累々たる死体が散乱し、勧進聖の手によって死骸は河原や油小路通の空き地に埋葬したというのも、極端な大飢饉によるものであろう。やはり、5500余の遺骸が累積することは、常時の出来事ではなかったと考えたい。山科区旭山古墳群内の平安中期の火葬遺構や蔵骨器におさめたものは、どちらかといえば、庶民の葬儀にかかわるものとはいいがたいが、古墳の石室などを利用した庶民の墓とみられるもののほかに、このころの庶民の墓には、なかなか墓であると認識しにくい形態や構造のものがあるのではなかろうか。多くの人々が、ごく簡便な墓墳に副葬品もなく直葬され、永続的で管理された後代の墓地とは一線を画する形態のものであったと考え、今後の調査に期待したい。

また、都市の内には墓は作らせないという基本理念を破って、数は少ないが、10世紀以降は平安京の内部で墓が作られている。右京三条三坊や右京五条二坊の木棺土墳墓である。ともに右京の例であり、このころには右京が都市として衰退してゆくことと関連するのではないかと思われるが、右京三条三坊例では邸宅の建物と共存しており、特殊な事情によって造営されたものなのか、京内にも墓を作るという中世的なありかたの先駆とみるべきかについては、今後さらに検討したい。

## (2) 中世前半の京都と墓

### 1) 集团的墓地の顕在化

墓として形式の整った集团的墓地は、すくなくとも12世紀後半ごろには展開しつつあったと考える。そして、この時期に京都における中世的墓制が明確化するというべきであろう。京都大学構内 AT27区では、区画のなかに墓地が形成されているが、このころには、かつて遊宴狩猟、別業などの開放的山野であった地が、谷水田の開発、土砂の採取などの大きな土地再編の波にさらされていたことが、周辺の遺跡調査で判明している。一方、常盤東ノ町遺跡では、兆域として守られてきた古墳の墓域が、新しい墓地として活用されているが、これも周辺地域の土地再編の結果ではなかろうか。ともに、主体をなす葬法は伸展葬の木棺土壙墓で、北枕に埋納されたと推定できるものが多く、前代にみられた形式をほぼ踏襲している。葬法に画一性の高いことから、なんらかの管理者ともいうべきものの存在を想像させる。

さらに古くから葬地として著名な鳥辺野の一角に相当する東山山麓一帯では、墓地の遺跡が数多く遺存しているはずであるが、なかなか実態がつかめていない。開発の進展が早く、土地利用の変転がはげしいこともあるが、この鳥辺野の周辺地域を、墓地という観点から調査する機会にめぐまれないためであろう。

さて、藤沢典彦氏は、中世的な墓地の成立時期を平安末～鎌倉初頭のころにもとめ、中世の墓地文化は、平安貴族が作り上げてきたイメージを庶民化したものであったとしている。また、その契機を集村化にもとめている[藤沢1989]。つねに集住がおこなわれつづけてきた都市やその周辺においては、これより少し古い段階において墓制に変化が生じているものとみられるが、12世紀後半を中心とする時期に、墓制における中世的変革が生じたといっていよう。

### 2) 都市内の墓の本格的造営

次に、13世紀には都市内の墓が各所で造営されてゆく。それは都市機能が衰退した部分に墓が造営されるというのではない。東本願寺前古墓群では、道路が機能しており、都市空間が維持された状態で墓地が形成されつづけている。つまり、都市空間としての墓地が七条界限に出現する。こうした墓地が形成されたのは、葬儀にかかわった時衆の僧侶たちが七条に道場をもっていたことによるものと指摘されている。石井進氏や高田陽介氏の文献史学を中心とする研究によれば、都市内の墓地は、基本的に寺院と結びつけられたものとしてとらえられており、その形成は中世の終りごろ、すくなくとも15世紀後半以降とみられている[石井1987, 高田1986]。これは、寺院関係の史料を主体にされているためではないかと思われるが、境内墓地という観点から考えれば、妥当な見解である。しかし、考古学的調査によって、「時衆等の手で洛外葬地や河原などに遺棄同然に葬られることになる都市特有の移動集中型人口」[高田1986]以外に、都市内の墓地に葬られた13～15世紀の人々の存在がうかがえてきた。これらの都市内の墓地の葬法についてみるかぎり、遺棄という言葉はそぐわないと考える。堀内明博氏による京都七条町の復原図は、その景

観を活写したものである [堀内1993]。

また、被葬者も一般庶民であると言われる。それは、日用の瓦器羽釜・鍋、須恵器すり鉢などを蔵骨器としているものが多いためでもあるが、火葬を基本とするものも多いため、上層の庶民たちの墓と考えられ、とくに富裕な商工業民が多く含まれているのではないかと推定する。

### 3) 絵画や文献にあらわれた中世の墓地

中世の墓地の景観を示すものとして、しばしば『餓鬼草子』にみえる墓地の情景がひきあいになされる。埋葬されない遺体が散見されることから、死体が遺棄に近い状態で処理されることがよくあったと考える根拠としてあげられる。これは、疾行餓鬼と食糞餓鬼が墓地に暗躍する姿であり、それが誇張して描かれているとも思われるが、水藤真氏は、同時異事法による描写ではないかと指摘されている [水藤1991]。傾聴に値する見解であると考ええる。

また、『北野天神縁起絵巻』に描かれた墓地には、死体をほうばる犬がみられ、死体には埋葬されない状態のものがあったことがわかる。このほか、鎌倉中期に製作された聖衆來迎寺の六道絵の人道不浄道には、美女が死んで、その遺骸が野に捨てられたのち、やがて腐敗が進んで白骨となるまでの変化が細密に描かれている [宮1988]。遺骸は蕤の上に横たえられたのみであるが、枕元には添え物がみえる。

文献では、13世紀はじめごろに成立した『閑居友』上<sup>(6)</sup>「あやしの僧の宮づかへのひまに不浄観をこらす事」には、比叡山の僧侶が毎夜西坂本を下って蓮台野にゆき、いまいましく乱れた死人のそばに寄り添って泣いたという話がある。これも埋葬されない遺体の存在を示すものであろう。

また、13世紀末に作られた『本願寺聖人伝絵』<sup>(7)</sup>には、親鸞聖人の遺骸を茶毘に付す情景が描かれており、詞書には「洛陽東山ノ西麓鳥辺野ノ南ノホトリ、延仁寺ニ葬シタテマツル。遺骨ヲ拾テ、同山ノ麓、鳥辺野の北辺、大谷ニコレヲオサメ畢ヌ」とある。描かれた鳥辺野の茶毘の場のそばには五輪塔や石仏、率塔婆がみえ、墓地内であることが明らかであるが、五輪塔には笠部の転落したもの、率塔婆には苔むして傾いたものもあり、髑髏がふたつほど転がっている。

こうしたものが、中世前半の都市の住民にかかわる墓地のひとつの姿であることにはまちがいないが、普遍的な墓の景観であったかどうか、速断することはできないのではなからうか。いずれにせよ、衛生観念にもとづき管理のゆきとどいた後代の墓地の景観とは大きく異なり、茶毘がおこなわれる場が庶民の墓場であり、定期的な墓参のおこなわれる代々の墓所の成立は、次の時代をまたねばならなかった。

## (3) 中世後半の京都と墓

### 1) 墓寺の明確化

15～16世紀の墓をみると、左京三条三坊では円福寺、同志社大学構内遺跡では報土寺、松蔭町遺跡では信行寺という寺があったと推定されており、庶民の埋葬にもかかわる墓寺が明確化しつつあったと推定される。遺跡をみると、前述のように、都市内の墓には、簡略な土葬方式も増加

しており、周辺の農村部の墓地においても、やや富裕であったとみられる清水本荘の住民たちの墓（羽束師志水遺跡）などを除けばほぼ同じような傾向ではなかろうか。これは、被葬者がさらに下の階層にもおよんでゆき、墓が簡素ではあるが数量的に増加したものと思われる。葬式仏教への転換が明瞭になってゆき〔圭室1933・1963〕、これと呼応して庶民も代々占有し、墓参もおこなわれるような墓地が、顕在化してゆくとみられる。墓標の一石五輪塔として、常盤東ノ町遺跡では永正年間（1504～1520）銘、左京三条三坊遺跡では永禄元年（1559）銘、同志社大学構内遺跡では永禄5年（1562）銘のものが、それぞれ出土している。江戸時代の初期に確立される寺請（檀家）制度は、こうした動向を追認して、徹底固定化したものであろう。

## 2) 都市再編と墓地

応仁の乱の後、京都の町は徐々に復興し、その都市域は大きく拡大していった。そして、16世紀末～17世紀にかけても、京都の墓は大きく変動したと推定できる。すなわち、豊臣秀吉が天正19年（1591）に京廻りに御土居と呼ばれる土塁を築造して都市の範囲を確定し、そのなかの町割りにも規制を加え、鴨川の右岸に沿った地域に寺町を作った。こうした過程のなかで多くの寺が整理統合され、転入・転出することとなった。墓地もこれと運命をともにしたものが多いとみられる。考古学的調査がおこなわれた墓地の遺跡は、その多くがこうした土地利用の改変によって廃絶したものであり、その遺構の遺存状態はかならずしも良好とはいえない。また、火葬をおこなう場合は、火家あるいは火屋などと呼ばれたが、鳥辺野の火家は慶長3年（1598）に阿弥陀ヶ峰に豊国社を造営するにあたり、その臭気が社頭を犯すために、建仁寺門前に移転している〔浅香・八木澤1983〕。こうして、近世・近代へとつながる墓のありかたが定着していった。

以上のように、京都においては都市の土地編成の大きな変化に、墓のあり方が連動して変化してきたといってもよい。さらに、これらの変化が、他の地域の動きに触発されたものなのか、それとも先導的役割をはたして他の地域に影響を与えたのか、また、その社会的背景などについて今後検討したいと思う。

## おわりに

本稿は、国立歴史民俗博物館平成2～4年度共同研究「日本における基層信仰の研究—死者儀礼と死の観念—」において、「古代・中世の京都の墓」と題して1992年2月27日に発表した時の原稿をもとに、加筆訂正して作成したものである。座長をつとめられた杉山晋作先生をはじめ、研究会に参加された各位には、多くの御教示をたまわった。とくに、田中久夫・水藤真の両先生の文献史料をもとにした葬儀と墓制に関する詳細な研究には感服したが、これらの労作を消化できず、本稿にはその豊かな内容をほとんど盛り込めなかった。末筆ながら謝意とお詫びを申し上げたい。

（京都大学埋蔵文化財研究センター、国立歴史民俗博物館共同研究員）

## 註

- (1) 寺田貞次『京都名家墳墓録』1922年などがある。
- (2) 「ならびの岡に無常所まうけてかたはしに桜を植ゑさすとて  
契おく花とならびの岡のへにあはれ幾世の春をすぐさむ」
- (3) 遺骸を布や蓆などにくるんだだけのものも直葬と呼ぶこととする。
- (4) 笠松宏至・佐藤進一・百瀬今朝雄編『中世政治社会思想』下 (日本思想大系22 岩波書店) 1981年所収。
- (5) 『群書類従』第18輯所収。
- (6) 『続群書類従』第32輯下所収。
- (7) 故澤村専太郎君記念会編『本願寺聖人伝絵』1931年。詞書は『続群書類従』第9輯所収。

## 参考文献

- 浅香勝輔・八木澤壮一 1983 『火葬場』(大明堂)
- 石井 進 1987 「中世の都市と墓」『朝日百科 日本の歴史』No73 (朝日新聞社)
- 五十川伸矢 1981 「平安京・中世京都の葬地と墓制」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和55年度
- 宇野隆夫 1979 「鴨東の開発—平安京と京近郊—」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度
- 岡田保良・吉野治雄 1979 「京大理学部遺跡 BE29区の発掘調査」『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度
- 堅田 修 1965 「藤原道長の浄妙寺について」『摂関時代史の研究』(古代学協会)
- 木村泰彦・中井正幸・北村大輔 1985 「長岡京跡右京第130次調査概要」『長岡京市埋蔵文化財報告書』第2集
- 京都市編 1968～1972 『京都の歴史』第1～5巻 (学藝書林)
- 京都市編 1983・1979 『史料京都の歴史』第2巻考古・第3巻政治・行政 (平凡社)
- 水藤 真 1991 『中世の葬送・墓制』(吉川弘文館)
- 杉山信三 1954 「吉田寺について」『史迹と美術』242号
- 高田陽介 1986 「境内墓地の経営と触穢思想」『日本歴史』第456号
- 田中久夫 1975 「文献にあらわれた墓地」『日本古代文化の探求 墓地』(社会思想社)
- 田中久夫 1978 『祖先祭祀の研究』(弘文堂)
- 圭室諦成 1933 「葬式法要の発生とその社会経済史的考察」『日本宗教史研究』(隆章閣)
- 圭室諦成 1963 『葬式仏教』(大法輪閣)
- 角田文衛 1969 「村上源氏の螢域」『古代学』第16巻第2～4号
- 野口 実 1988 「京都七条町の中世的展開」『朱雀』第1集
- 浜崎一志 1991 「白河の条坊地割」『京都大学埋蔵文化財調査報告』IV
- 林屋辰三郎 1957 「藤原道長の浄妙寺について」『古代国家の解体』(東京大学出版会)
- 林屋辰三郎ほか編 1979 『京都市の地名』(『日本歴史地名大系』第27巻 平凡社)
- 藤沢典彦 1989 「中世の墓地ノート」『仏教芸術』182号
- 堀内明博 1993 「京都七条町の復元—考古学から見る」『歴史を讀みなおす』6 (朝日新聞社)
- 埋文研 (埋蔵文化財研究会) 1983 『第13回埋蔵文化財研究会資料 古代・中世の墳墓について』
- 宮 次男 1988 『六道絵』(日本の美術127 至文堂)
- 和田 萃 1976 「東アジアの古代都城と葬地—喪葬令皇都条に関連して—」『大阪歴史学会二十五周年記念 古代国家の形成と展開』

## 古代・中世墓の遺跡一覧

上段に遺跡番号, 遺跡名, 所在地, 遺構・遺物, 時代, 下段に参考文献を列記した。

- 1 植物園北遺跡 京都市北区上賀茂 集石墓 鎌倉～室町時代  
京都市『史料京都の歴史』第2巻考古 1983
- 2 小野毛人墓 京都市左京区上高野 石室・墓誌 奈良前期  
梅原末治「小野毛人の墳墓と其墓誌」『考古学雑誌』第7巻第9号 1917
- 3 京大構内 BD33区 京都市左京区北白川追分町 甕棺 奈良時代  
中村徹也『京都大学農学部総合館周辺埋蔵文化財発掘調査の概要』1973

- 4 京大構内 BE29区 京都市左京区北白川追分町 火葬塚 13世紀前半  
京都市埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度 1979
- 5 京大構内 AT27区 京都市左京区吉田本町 木棺土墳墓 12～13世紀  
京都市埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和55年度 1981
- 6 京大構内 AT29区 京都市左京区吉田本町 土墳墓 12世紀中葉  
京都市埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和58年度 1986
- 7 京大構内 AP22区 京都市左京区吉田二本松町 土墳墓 13～14世紀  
京都市埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和57年度 1984
- 8 京大構内 AO21区 京都市左京区吉田二本松町 木棺土墳墓 14世紀後半  
京都市埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和56年度 1983
- 9 京大構内 AO18区 京都市左京区吉田近衛町 土墳墓 14世紀  
京都市埋蔵文化財研究センター『京都大学構内遺跡調査研究年報』昭和53年度 1979
- 10 化野念仏寺 京都市右京区山ノ内宮前町 古瀬戸四耳壺 鎌倉前期  
乗安和二三「化野念仏寺境内の蔵骨器」『古代文化』第28巻第9号 1976
- 11 化野念仏寺南側 京都市右京区嵯峨鳥居本化野 褐釉陶器 平安末期  
小曾山一良「化野の墳墓」『京都市考古資料館解説』No.59 1993
- 12 御堂ヶ池11号墳 京都市右京区梅ヶ畑向ノ地町 木棺 15世紀  
京都大学考古学研究会『嵯峨野の古墳時代』1971
- 13 広沢古墳 京都市右京区嵯峨広沢池下町 火葬骨・須恵器小瓶 平安中期  
京都府教育委員会『京都府文化財調査報告』第22冊 1961
- 14 広隆寺境内遺跡 京都市右京区太秦 土墳墓 室町後半  
京都市埋蔵文化財研究所『広隆寺跡』1977
- 15 常盤東ノ町遺跡 京都市右京区常盤東ノ町 土墳墓 12世紀～近世  
京都市埋蔵文化財研究所『常盤東ノ町古墳群』1977
- 16 常盤仲ノ町遺跡 京都市右京区常盤仲ノ町 土墳墓 鎌倉時代～近世  
京都市埋蔵文化財研究所『常盤仲ノ町集落跡発掘調査報告』1978
- 17 東衣手遺跡 京都市右京区西京極 須恵器合口甕 飛鳥～奈良時代  
京都市文化観光局『京都市遺跡地図』1989
- 18 同志社大学構内 京都市上京区玄武町 土墳墓 16～17世紀  
同志社大学校地学術調査委員会『同志社女子大学図書館建設予定地発掘調査概要』1976
- 19 烏丸線No.23・42地点 京都市上京区烏丸通下立売下る 土墳墓 室町時代  
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』I 1979,  
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』II 1980
- 20 松蔭町遺跡 京都市上京区寺町通荒神口下る 土墳墓 16～17世紀  
同志社埋蔵文化財委員会「松蔭町遺跡発掘調査現地説明会資料」1992,  
竹居明男・西岡直樹「信行寺大悲尊蔵縁起絵巻」『びぶりおてか』No.39 1986
- 21 右京三条三坊 京都市中京区西ノ京徳大寺町 木棺土墳墓 10世紀  
京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡右京三条三坊』1991
- 22 右京五条二坊 京都市中京区壬生西櫓町 須恵器 9世紀・木棺土墳墓 11世紀後半～12世紀前半  
京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘調査報告』昭和55年度 1981
- 23 中之町遺跡 京都市中京区新町通御池上る 土墳墓 室町時代  
京都市埋蔵文化財調査センター『京都市内遺跡試掘・立合調査報告』昭和55年度 1981,  
京都市『史料京都の歴史』第2巻考古 1983
- 24 左京三条三坊 京都市中京区烏丸通御池下る 土墳墓 15～16世紀  
古代学協会『平安京左京三条三坊十一町』1984
- 25 法住寺殿跡 京都市東山区三十三間堂廻り 武士の墓 12世紀後半～13世紀  
古代学協会『法住寺殿跡発掘調査概要』1979
- 26 地藏山遺跡 京都市東山区今熊野日吉町 墓 奈良後期

- 京都市文化観光局『京都市遺跡地図』1989
- 27 渋谷 京都市東山区渋谷 常滑三筋壺 鎌倉初期  
田中勝弘「京都市東山区渋谷出土の骨壺」『古代文化』第25巻第10号 1973
- 28 永明院開山堂 京都市東山区本町 円観禅師墓 14世紀初頭  
八賀晋「東福寺塔頭永明院の発掘調査について」『月刊文化財』207 1980
- 29 龍吟院 京都市東山区本町 大明国師墓 13世紀末  
文化庁『重要文化財』29 考古II 1976
- 30 光明峯寺奥ノ院跡 京都市東山区今熊野本多山町 九条道家墓 13世紀半ば  
京都市文化観光局文化財保護課『京都市埋蔵文化財年次報告』1976-III 1977
- 31 成徳小学校遺跡 京都市下京区高辻通室町 土墳墓 江戸時代  
京都市埋蔵文化財研究所『京都市域における埋蔵文化財の発掘・試掘・立合調査一覧』198
- 32 左京五条三坊十五町 京都市下京区高倉通綾小路下る 土墳墓 中世  
古代学協会『左京五条三坊一五町』1981
- 33 左京六条二坊 京都市下京区油小路六条上る 土墳墓 鎌倉～南北朝時代  
古代学協会『平安京左京六条二坊六町』1986
- 34 大工町遺跡 京都市下京区七条通大宮東入る 土墳墓 室町時代  
京都市『史料京都の歴史』第2巻考古 1983
- 35 東本願寺前古墓群 京都市下京区烏丸通東本願寺前 土墳墓 鎌倉～室町時代  
(烏丸線№36・37・71-73, 立合20・21)  
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』I 1979,  
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』II 1980,  
京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査会『京都市高速鉄道烏丸線内遺跡調査年報』III 1981
- 36 左京八条三坊 京都市下京区塩小路新町東入る 土墳墓 13～15世紀  
京都市埋蔵文化財研究所『平安京左京八条三坊』1982,  
古代学協会『平安京左京八条三坊二町』1983
- 37 左京七条三坊 京都市下京区正面通烏丸東入る 木棺・甕棺 鎌倉～室町時代  
古代学協会『平安京左京七条三坊五町』1985
- 38 上久世城ノ内遺跡 京都市南区久世上久世町 土墳墓 鎌倉～室町時代  
堀内明博・百瀬正恒・吉村正親「上久世城ノ内遺跡」『仏教芸術』115号 1977
- 39 上久世遺跡 京都市南区久世上久世町 土墳墓 10世紀  
京都市考古資料館『京都市考古資料館文化財講座資料』第51回 1992
- 40 久我東町遺跡 京都市伏見区久我東町 土墳墓 平安後期～室町時代  
京都市埋蔵文化財研究所『平安京跡発掘資料選(二)』1983,  
京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財調査概要』昭和59年度 1987
- 41 羽束師志水遺跡 京都市伏見区羽束師志水町 土墳墓 16世紀～近世  
京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財調査概要』平成元年度 1994
- 42 鳥羽離宮跡57次 京都市伏見区竹田内畑町 土墳墓 16世紀  
京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡調査概要』1981
- 43 鳥羽離宮跡40次 京都市伏見区竹田浄菩提院町 木棺土墳墓 室町時代  
京都市埋蔵文化財研究所『鳥羽離宮跡』1978
- 44 鳥羽離宮跡96次 京都市伏見区竹田浄菩提院町 白河天皇陵堀 平安後期(12世紀)  
京都市埋蔵文化財研究所『京都市埋蔵文化財調査概要 昭和58年度』1975
- 45 中ノ郷山遺跡 京都市伏見区深草中ノ郷山町 須恵器壺 平安時代  
小川敏夫「京都市深草の骨蔵器」『古代学研究』第27号 1961
- 46 馬谷遺跡 京都市伏見区深草馬谷町 須恵器蔵骨器 平安後期?  
京都市文化観光局『京都市遺跡地図』1989
- 47 醍醐寺三宝院墓地 京都市伏見区醍醐東大路町 宝篋印塔 13世紀後半～16世紀  
京都府教育委員会『醍醐寺三宝院宝篋印塔修理工事報告書』1984,



- 増田孝彦「醍醐寺三宝院墓地」『仏教芸術』182号 1989
- 48 西野山古墓 京都市山科区川田梅ヶ谷町 木棺・双鳳鏡 奈良時代～平安前期  
梅原末治「山科村西野山ノ墳墓ト其ノ発見ノ遺物」『京都府史蹟勝地調査報告』第1冊 1920,  
島田貞彦「最近発見せられたる平安朝時代の墳墓」『歴史と地理』第4巻第1号 1919
- 49 旭山古墳群 京都市山科区上山山旭町 火葬墓 平安中期  
京都市埋蔵文化財研究所『旭山古墳群発掘調査報告』1981
- 50 安祥寺下寺推定地 京都市山科区上山山旭町安朱 木槨墓 平安前期  
高正龍「木炭木槨墓を発見」『京都市考古資料館解説』No61 1994
- 51 大日寺跡 京都市山科区勸修寺 緑釉陶器 10世紀  
木村捷三郎「平安中期の瓦について」『延喜天曆時代の研究』1969
- 52 大宅廃寺跡 京都市山科区大宅 土墳墓 平安後期  
坪井清足「大宅廃寺の調査」『仏教芸術』37号 1958
- 53 伊勢講山古墓 京都市西京区大枝沓掛町 木棺直葬 8世紀末～9世紀初頭  
京都大学文学部『京都大学文学部博物館考古学資料目録』第2部日本歴史時代 1968,  
梅原末治「山城大枝の奈良時代の一古墳」『史迹と美術』第418号 1971
- 54 宇治宿禰墓 京都市西京区大枝塚原町 蔵骨壺・墓誌 768年  
梅原末治「山城に於ける宇治宿禰墳墓及墓誌」『芸文』第8巻第4号 1917,  
島田貞彦「最近発見せられたる平安朝時代の墳墓」『歴史と地理』第4巻第1号 1919
- 55 福西古墓 京都市西京区大枝福西町 石棺利用 10世紀  
京都府教育委員会『埋蔵文化財調査報告』1961年 1962
- 56 夷山古墓 京都市西京区大枝中山町 古銭 9世紀  
向日市史編さん委員会『向日市史』上巻 1983
- 57 長野古墓 向日市物集女町長野 土墳墓 9世紀前半  
梅原末治「向日町長野ノ墳墓」『京都府史蹟勝地調査報告』第4冊 1923
- 58 長岡京跡左京70次 向日市鶏冠井町 合口甕棺 長岡京廃絶後  
京都府教育委員会『埋蔵文化財調査概要』1978年 1978
- 59 長岡京跡右京8次 向日市森本町 火葬墓 鎌倉～室町時代  
向日市教育委員会『向日市埋蔵文化財調査報告書』第8集 1982
- 60 長岡京右京第130次 長岡京市天神 墳墓 11世紀後半・焼土墳 12世紀末～13世紀初頭  
長岡京市埋蔵文化財センター『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第2集 1985
- 61 長岡京右京第28次 長岡京市神足 土墳墓 13世紀後半  
長岡京市教育委員会『長岡京市文化財調査報告書』第5冊 1980
- 62 回向場遺跡 長岡京市井ノ内 須恵器壺 奈良時代  
角田文衛「京都府長岡町出土骨壺」『古代文化』第5巻第5号 1960
- 63 不動尊古墓 長岡京市栗生 須恵器壺鉢 奈良時代  
梅原末治「乙訓村出土骨壺」『京都府史蹟天然記念物調査報告』第12冊 1931
- 64 八軒屋古墓 宇治市広野町 蔵骨石櫃 奈良時代  
和田千吉「奈良時代墳墓の考定に就て（上）」『中央史壇』第12巻第4号 1926
- 65 木幡古墓 宇治市木幡 須恵器壺 奈良時代  
白石太一郎「宇治木幡出土の蔵骨器」『古代文化』第20巻第12号 1968
- 66 広岡谷古墓 宇治市広岡谷 須恵器 奈良時代  
宇治市『宇治市史』第1巻 1973
- 67 宇治陵古墓 宇治市木幡（宮内庁管理） マウンド  
宇治市『宇治市史』第1巻 1973,  
宇治市教育委員会『宇治市遺跡地図』1986
- 68 浄妙寺跡 宇治市木幡 三昧堂・多宝塔 11～15世紀  
杉本宏・荒川史「宇治市木幡浄妙寺の発掘調査」『古代文化』第43巻第11号 1991,  
杉本宏・荒川史「木幡浄妙寺の発掘調査」『日本考古学協会第57回総会研究発表要旨』1991

## History of Medieval and Ancient Period Grave Sites as Seen in Archeological Excavations in Kyoto and the Surrounding Area

ISOGAWA Shinya

Utilizing data from grave site excavations in the Kyoto area, this research traces the history of grave systems in the capital city through the Ancient and Medieval Periods. During the Ancient Period, the government did not permit graves in the Heiankyo city. This was most likely due to the impurity that was believed to surround death. Emperors and aristocrats were buried in undeveloped areas surrounding the city, but it is said that the bodies of commoners were simply left on the riverbed.

In the 12th century, the collective graveyards that characterize the Medieval Period began to appear. The practice of extended burials in wooden coffins was carried over from the Ancient Period. During the 13th century, graveyards were provided within the city, breaking the centuries old taboo mentioned above. Some of these graves were flexed or crouched burials in coffins, but bones of the deceased were also buried in various funerary urns after cremation.

During the 15th century, straight burials without coffins increased. This trend may reflect the fact that a greater percentage of the population was being buried. Buddhist temples began to manage graveyards, and many commoners also started to utilize family graves, which they visited periodically to pay respects to their ancestors. In the 16th century, however, the urban areas were reorganized, and many graveyards and crematoriums were forced to move. By this time, the foundation for the modern system of graveyards and burials had been formed.